

「ラルーターヨ」…これはフィリピン語で「遊ぼう」という言葉です。私はフィリピンで、小学校の五年生の三月の夏休みまで暮らしていました。朝も夜も賑やかなフィリピン。伝統的なクリスマスのミサ。青い海と空。そして食べものは、バナナの葉っぱの上に乗せて手でつかんで食べたりするのですが、今思えばそれもピクニックのようで、すてきな思い出となって残っています。

今から二年十ヶ月前、フィリピンの祖母と妹と私の三人が、初めて飛行機に乗って四時間。福岡空港に着いた瞬間、熱帯のフィリピンと違って、三月の福岡は体全体に冷たい空気を感じました。入国管理のところで、たくさんの書類を見せないといけませんが、日本語が全然わかりません。私は、どきどきしてとても不安でした。すると英語で説明してくれ、おかげで何とか日本に入国することができました。それから三ヶ月後にフィリピンに帰る時、今度は空港で迷子になりました。その時に助けてもらったのがグラウンドスタッフでした。来た時も帰る時も、心に残ったできごととなりました。

帰国して小学校を卒業すると、いきなり母が「日本で勉強を続けるから、フィリピンの学校にはもう行かせないよ。」と言うのです。「嫌だ。」と言い返しましたが、母が決めたことには従わなければいけない国です。私は直ぐに自分の思いを心の中に隠しました。それから不安なままで日本に数ヶ月間いましたが、何かの書類が違っていたらしく、フィリピンに戻らなければならないことになりました。たった紙切れ一枚で、私たちは日本とフィリピンを行ったり来たりしたのです。フィリピンに帰ってから半年間は、学校にも行かれない状態が続き、その後も三年間は日本に来ることができず、つらく虚しい思いで過ごしました。日本に行くのをもうあきらめようかと思いました。すると母が、「いつも欲しいものを直ぐに買ってもらえていたけど、今回のことは直ぐには叶わないよ。これは神があなたに与えた、一つの挑戦だよ。あきらめないで。」と言ったのです。母の言葉に従って、私自身を納得させました。フィリピンでの三年間は、日本に行って学びたい一心で、今できることを頑張りたいと思いました。日本に行くという目的意識を持ってひたすら力をつけながら待っていたのです。中学二年生の時に、やっと日本に来ることが叶い、日本の中学校に行けるようになりました。中学校二年生三学期からのスタートでした。

日本語を学んでいましたが、日本ではとたんに言葉の意味がわからなく、不安ばかりの毎日でした。日本の食事もいまだに生ものは無理です。「ラルーターヨ」もクリスマスのミサも海の色も、遠い記憶の向こうに消えていきました。日本は、仕事が少ないフィリピンに比べると、忙しいほど誰にも公平に仕事があります。それは日本の良いところですが、両親とゆっくり時間を取ることができないのは少し残念に思います。仕事が少ないと言いましたが、大学を卒業した人にはたくさん仕事があります。だから貧しい家庭の人たちには、いつまでたっても貧しさから、なかなか抜けることができないのが現状です。

私は、日本で生きていこうと決心したのですから、日本で頑張るしかありません。そんな時、初めての担任の先生に、将来の夢を聞かれました。その時、福岡空港で私たちを救ってくれたグラウンドスタッフの姿が浮かびました。自分の英語を活かしたい、私のような迷子になった人のお手伝いがしたいと思ったのです。それは今も心の中で、ずっと目標としていて変わっていません。将来に向けて日本語・英語・フィリピン語とコミュニケーション能力をもっともっと学びたいと思っています。「ネバー・ギブ・アップ、グレート・シングズ・テイク・タイム」「あきらめるな。すごいことを成し遂げるには時間がかかるのだから。」という言葉があります。まだ日本の文化や風習に慣れていませんが、何事もあきらめずに、これからも挑戦していきたいと思っています。

人はよく、「何とかなる」と言いますが、私は、簡単には何とかならないと思います。何とかするのは、あきらめないで何とかしようと努力する人に与えられる言葉だと思います。あきらめてしまって何にもしない人には何ともならないと思います。だから、自分の目標に向かって、あきらめないで「何とかするために」これからも頑張っていきたいと思っています。